



荒川法勝



傑作時代小説叢書

奇説

●書下し時代小説

慶安太平記

荒川法勝



傑作時代小説叢書

奇説

●書下し時代小説

慶安太平記

著者／荒川法勝（あらかわ のりかつ）

1921年岩手県生まれ。慶応義塾大学卒。詩人、作家。詩、小説、評伝等多岐の分野にわたって活躍。著作は「天開山」「波のうえの図」「平将門伝」「南総里見八犬伝考」「現代詩文庫37・荒川法勝詩集」などの他、「異説忠臣蔵」「真説南総里見八犬伝」など時代活劇の力作も多い。

奇説 慶安太平記

著 者 荒川法勝
発行者 水谷晃三
発行所 株式会社 青樹社
〒101 東京都千代田区三崎町2-6-7
電話 03-3264-6902(代)
FAX 03-3262-9262
振替 東京 1-47648
電子組版 株式会社 カネコ
印刷所 誠宏印刷株式会社
製本所 土開製本株式会社

定価・発行年月日はカバーに表示してあります。

ISBN4-7913-0759-3

奇說慶安太平記

目次

第一章	秋月の影	7
第二章	旋風下総国	27
第三章	正雪の渦	52
第四章	東海道を追え	68
第五章	葵の絆	88
第六章	刺手の声	108
第七章	駿府の謎	124

第八章 青山屋敷

141

第九章 剣光金谷宿

157

第十章 廻国者の策

174

第十一章 江戸の囃

188

第十二章 江戸城の対決

204

第十三章 大激突

224

あとがき

250

装幀 * 辰巳四郎

奇說慶安太平記

第一章 秋月の影

一

残暑が続いた秋口の深夜である。

離れ屋で起居している本宮忠三郎もとみやちゆうざぶろうは、寝苦しさの中で、ふと眼覚めた。何か母屋の方で激しく争う叫び声があった。

「ただ事ではない」

忠三郎は、がばと掛け蒲団を撥はねのけ、刀を持って廊下に出た。中庭沿いの兩戸を少し開けると、母屋の方へじつと眼を凝らした。

月の光とともに夜気が入ってくる。

本宮家は五百石の直参旗本で、祖父忠左衛門は御

旗奉行を勤めたこともある。番町ばんちょうの拝領地も八百坪ほどに近い。だから、東側の離れ屋からは、中庭の木立に遮られ、見透しが悪いのである。静かで虫の音もしない。

空耳かと、忠三郎はじつとしていたが、何となく胸騒ぎがして、部屋に戻り、急いで身支度を整え、大小を帯して中庭に出た。

敷石を行くと、母屋の方で、「塚原どの、仕留めましたぞ」という声がし、続いて長屋で女の悲鳴がした。異変が屋敷内で起こっていることは確かだ。

猶予はならぬとつきに判断し、前の木立の枝を払い出ようとした。そのとき、前方十間ほどに月の光を浴びて敵の姿が見られた。忠三郎は太刀を抜いた。

相手も彼を見とめたらしい。背は六尺近く、十分な身支度で太刀を片手に下げている。

忠三郎は油断なく立ちどまり、正眼に構え、「何者だ」と咎めた。

敵は無言のまま、やはり正眼に構え、じりじりと

間合いを詰めてくる。その構えに隙がない。できるなと忠三郎は思った。

しばらく、彼らは睨み合っていた。そのうち、敵は刀の切っ先をいく分すり上げた。忠三郎はその隙に乗り、突きを入れたが軽くかわされた。敵の誘いだったのだ。

それとともに、激しい攻めが向かってくる。忠三郎は数歩後ろにさがった。だが、敵は攻めをゆるめず、今度は彼を威圧するかのように大上段に振りかぶり、斬り込んできた。

忠三郎は受けることも気にかけず、逆に敵の顔を突いた。敵がひるんだ瞬間、彼はその体めがけ、背をまっすぐ伸ばし、思いきり踏み込んだ。十分の手ごたえがあり、敵の体が前によろけ、草がしだかれ音が出た。だが、彼も左腕に激痛を覚えたのである。

そのとき、母屋で声が出た。忠三郎は刀を下げて、その方に眼を光らせた。

雨戸は破られ、廊下のところで、敵がこちらをう

かがい、「離れ屋の弟を仕留めたか」と、遠くから声がした。忠三郎は茂みから、食いつくように敵を睨んだ。

すると、母屋の内から、「塚原どの、まだ、奥におりますぞ」と叫ぶ声が出た。塚原と呼ばれた敵は、廊下から内に入っていた。それにしても、自分が離れ屋にいることを、どうして敵側は知っているのだろうか。

早く母屋に行き、父や母、そして兄妹を守らねばと、忠三郎の心は焦った。だが、急に左の腕に激しい痛みが襲いかかり、体の力がなくなった。腕からの出血がひどいらしい。皮膚を伝って血が流れ落ちてくる。

敵が三人抜刀し庭に出て、「長屋の者どもは、皆、討ち取ったぞ」と叫び、こちらをうかがいながら、母屋の方へと走っていった。

忠三郎は、中庭の隅の樫かしの古木の幹の下に腰を下ろし、手当てをしようとした。

そのとき、樫かしの古木の傍の灌木が揺れた。忠三郎

は敵が自分を探していると察し、右手で刀を構えた。

茂みから、優しい声がした。

「信乃でございます」

声とともに、侍女の信乃の顔がのぞいた。

「そなた、大丈夫か」

「はい、忠三郎さまは」

忠三郎は緊張が解けると、激しい痛みが、また襲ってきた。

「うむ」

「まあ、お怪我をなさっているのでございますね」

信乃は這うようにして、彼の傍に寄った。

「左腕の上を強く縛ってくれ。早くだ。俺はこうしてはおられない。母屋に行かねばならぬ」

信乃はしごきをほどき、忠三郎の上膊を縛って応急の血止めをしてくれた。その手の感触はやわらかかった。

「信乃は逃げろ。間もなく敵が来る」

「忠三郎さまも一緒にです」

「馬鹿な」

「いいえ、これは大殿さまからの直接の敵命でございますぞ」

「そんな、嘘だ」

「私がこうして、命がけで敵の眼を欺き、何のために忠三郎さまを探したと思われましますか。逃げるなら、とっくにお屋敷を去っております」

実は忠三郎の父忠右衛門が、不意の刺客の侵入を知り、宿直をしていた用人黒木甚内くろきじんないに、忠三郎だけは生命にかけて逃がしてくれ、と敵命し、甚内は女部屋の信乃の許に来て、忠三郎を探し、その旨を伝えよといったというのである。

「しかし」

忠三郎は右手で刀を握り、立ち上がろうとしたが、痛みのためか、体の動きがにぶい。

「なりませぬ。大殿のおことばでございますぞ」

「しかし、どうして俺だけが」

腑に落ちないが、信乃に促され忠三郎は、櫃の古木から、灌木の茂みを潜り、南面の塀沿いに進んでいた。

「裏門から出るのか」

「はい、私が見て参ります。ここでお待ち下さい」

あとに残った忠三郎は、刀を握ったまま、塀に体をもたせていた。

地虫が鳴いている。

遠くで、「離れ屋の弟はいないぞ」という声がした。

地虫の音がやんだ。信乃の白い顔が浮かんた。

「駄目です。裏門には四、五人の侍がいます」

「心配するな。出口はある」

忠三郎は、低い落ち着いた声で答えた。

裏門の方で、激しい斬り合いの叫びがした。

「一人も逃がすな。必ず討ち取れ」

そう下命する声が風に乘って流れてくる。

「忠三郎さま、早く」

「ついてこい」

忠三郎は、信乃を連れて、塀沿いに東面に進んでいく。

「ここだ」

忠三郎は、竹藪の少しあいた場所から、内に入っ

ていった。

かつて、そこに小さな潜り戸があつた。忠三郎が少年の頃、錆びた釘を取り、外に遊びに出る秘密の出入り口にしていた。この抜け穴は、そこを出ても、外からは気づかれない。塀の下が土手になり、先祖の植えた松が数本茂っている。穴のあたりは、灌木の茂みになっているのだ。小さな脇道を隔てて、旗本八百石藤沢伯耆守勝成の屋敷の長い塀が続いている。めったに人は通らない。

「まあ、こんな抜け穴がございましたの。忠三郎さまが、いつの間にか、離れ屋に帰られて、皆、不思議がつておりましたが。隅に置けない方でございますこと」

信乃は、忠三郎の耳もとで囁いた。

月が中天にのぼり、薄雲がかかっている。風が少し出てきた。

緊張がいくらかゆるむと、また痛みに襲われて、

忠三郎は立ちどまった。

信乃は心配して顔を向けた。

「案ずるな」

彼が多少格好をつけていったのは、信乃への労りでもあった。しかし、元氣のない押し殺した声に、彼女は痛みを察していた。

「もう少しのご辛抱でございますよ」

忠三郎は頷いた。

番町の坂を下ると、小さな葦原^{あしはら}があり、その地藏堂の道を行くと、もう四谷への町家が広がっている。彼らはまた歩きだした。

なだらかな坂を下ると、もう心配があるまいと忠

三郎は、刀を鞘に収めた。

葦原の傍に古い地藏堂があり、小さな池がある。

子供の頃、兄や近所の旗本の子弟に連れられ、何度か釣りに来た場所である。

「ここで、夜明けを待とう」

彼は痛みをこらえていった。

「忠三郎さま、傷の手当てを早くなさいますと。しばらくの辛抱でございます。ここで、お待ち下さい。私は四谷の乳母の家に行つてすぐ戻ります」

信乃は彼の右腕を自分の肩にかけ、体を支えながら、地藏堂の段をのぼり、その内に入った。

「しかし、町屋の木戸が閉まっています。そなたもここで休むがいい」

「事は急でございます。お生命にもかかります」

信乃は堂から出ていった。気丈な娘だと彼は内心思っていた。

二

あの不気味な事件があつてから、もう一カ月近くも経った。

忠三郎は、信乃の父駿河屋藤兵衛^{すまがやふでべゑ}の計らいで、京橋に近い持ち家で静養を続けている。

どのような信乃の助けで、自分がこの家に運ばれてきたのか、彼ははっきりと覚えがない。あの夜、地藏堂の壁に背をもたせ、格子戸から漏れる光を見ているうちに、意識が朦朧^{もうろう}となりかけてきたことまでは覚えていた。

途中、川舟の床に寝たまま、信乃に手首を預けていたと思う。

忠三郎は、どうしてこの家に運ばれてきたのかと信乃に尋ねた。すると彼女は、お体を早く治されることです、というのみであった。

彼も二度と、そのことは口にしなかった。それにしてもあの夜の斬り合いで、敵を倒したとはいえ、左腕に深手を受けたのは何とした不覚であろうか。目録を取ったと己惚れていたが、自分の腕の未熟さを知らされたのである。

療養の間、ときおり訪れる藤兵衛に、本宮家の安否を聞いたが、なぜか、はつきりした返事がなかった。父母や兄や妹、そして用人黒木を初め若党、女中たちはどうなっているのでしょうか。といって、深手を負っている忠三郎には気を揉むだけでどうにもなるものではなかった。

夜、ときおり、忠三郎は父母や兄や妹の死顔を夢に見、はっと目覚めることがあった。彼も薄々、駿河屋の応答から、もう本宮家の身内は生きていない

のではと思うようになっていた。

一体、本宮家を襲った刺客は何者であろうか。

その朝、忠三郎は床の上に起き、じつと考えていた。どうも、あの夜の事件は、この夏の由比正雪謀反の大事と関係がありそうだと。

慶安四年（一六五二）七月、長兄、御徒頭本宮弥太郎が、幕閣の内意を受け、正雪一味が久能山に籠るのを追捕するため、駿府城加番秋田安房守方へ増援としてつかわされたのである。

幸い正雪一味が自刃したので、大事にいたらず、弥太郎は何事もなく、七月下旬に帰宅した。父母は、今度の事件でご加増であろうと、喜んでいたのに、長兄はなぜか浮かない顔をしていた。嫂の織江にそつと尋ねると、彼女は「長いご勤務と旅のお疲れでしょう」と答えた。

そればかりか、御用部屋若年寄中根宅岐守さまの内命で、しばらく出仕に及ばずとの旨が、弥太郎に達せられた。もちろん、この内命は、彼のみでなく、駿府増援加番に当てられた同行の旗本にもあったと

いう。

本宮家では、加番の骨休みだろうぐらいに受けとめていた。

だが、八月に入ると、長兄弥太郎が、書院の間に忠三郎を密かに呼び入れた。

弥太郎はいつにもなく厳しい顔をしていた。

「忠三郎、もし、私の身に何かが起こったら、本宮家のことを頼むぞ。また、佐倉さくらの源次郎にも、その旨を伝えてくれ」

忠三郎は不吉なものを覚えた。

「兄上、なぜ、そのような」

不審げに彼は聞き返したが、長兄は何も答えなかった。

「このことは父上や母上にも、他言無用」

「義姉上あねうえにもですか」

「無論のこと」

弥太郎は念を押すようにいった。

兄は駿府で正雪の謀反にかかわることで、何かがあったに違いない。ご政道に関する秘密なのであ

うか。

何事も物事に慎重な長兄である。すでに、あの夜のいまわしい事件を、それとなく予測していたのはあるまいか。あの夜の刺客は、かなりの手だれぞろいであり、統制もあった。また、自分が離れ屋に起居していることまで、どうして調べていたのだろうか。

忠三郎には、分からないことばかりであった。

「入ってもよろしいですか」

「ああ」

信乃が障子を開け、静かに入り挨拶をした。彼女は毎日、小女を連れて彼の介護に来ていたが、この頃では一人でもやってくる。

朝食が終わって一刻ほどいっときしたとき、駿河屋出入りの医師が治療にやってくる。その日も、小女に案内されて、いつもの医師が来た。老齢ではあるが腕は確かである。駿河屋一家は、この老医師に絶大な信頼を寄せていた。

老医師は背をかがめ、ゆっくり部屋に入ってきた。

忠三郎は、老医師に一礼をし、床の上に半ば体を起こした。

「お願いします」

「ああ」

この老医師の「拝見する」のことばは、常に「ああ」である。彼は手馴れたようすで、忠三郎の左腕の白綿布をほどき、傷の具合を子細に調べていた。

傍で、信乃がぼどいた白綿布をくるくると巻き、診察の具合を尋ねた。

老医師は無言のまま、薬箱から傷薬を取り、手早く傷の手当てをし、新しい白綿布を巻いた。

そのあと、手洗いで手を洗い、信乃の手渡す手拭を取ると、ぼそつといった。

「大分肉が盛り上がっている。もう少しだな」

老医師は、小女の持ってきた茶を飲むと、菓子は紙に包み、袂に入れ、ゆつくりと立ち上がって帰っていった。

信乃は戻ってくると、嬉しそうに傷の治りが順調にいつていると伝えた。

忠三郎は、両腕をそろえて存分に伸ばしてみた。

「無愛想だが、長い経験からか腕はしっかりしているらしいな」

「なんでも、駿河大納言すまがだいなごんさまのご典医だったという方があります」

信乃は茶をいれた。

「あの先生のように、すぐ役立つ職ならいいが、武士のほか何もできない浪人衆は、本当に厳しいな」
「そうでございますとも、住む家もない方もいるとのことです」

忠三郎は、何か暗い気分になった。

「外は上天気のような。久しぶりに外の空気でも吸いたいな」

忠三郎は素直にいった。

「老先生は、あと十日くらいといいました。ご辛抱下さい」

「もう、こう腕も伸びるし」

「なりません」

信乃が忠三郎の体を、親身になって心配してい